

GSI キャラバン 2021 年度研究計画 「小国」の経験から普遍を問いなおす

代表：伊達聖伸（総合文化研究科）

本年度はプロジェクトの2年目に当たる。沖縄をフィールドとする崎濱紗奈（東洋文化研究所東アジア藝文書院（EAA）・特任研究員）と、宗教学の観点からフランスと日本の世俗の問題を扱う田中浩喜（人文社会系研究科・博士課程）が新メンバーに加わった。コロナウイルスの影響下での活動を余儀なくされているが、1回の「GSI 海外学術キャラバン」を挙げるほか、国際セミナーの開催も予定している。

9月には平野克弥教授（カリフォルニア大学 LA 校歴史学部）を招聘し、国際法における主権概念をアイヌの歴史から問い直す報告をしていただく国際セミナーを開催する予定である。

11月には、カナダ・ケベック州のラヴァル大学に海外学術キャラバンを行い、東大側から5名、ラヴァル大学側から5名のラウンド・テーブルを開催する。渡航が不可能な場合はオンラインとする。受入側の代表はジャン＝フランソワ・ラニエル（Jean-François Laniel）教授で、伊達と概論的なセッションを組む。登壇予定者と発表概要は次のとおり。田中浩喜は幸徳秋水の帝国主義批判と小国論について、セリーヌ・フィリップ（Céline Philippe）は小国研究におけるケベック文学の意義について論じる。崎濱紗奈は独立後沖縄の憲法構想、フェリックス・マティウ（Félix Mathieu）はインターカルチュラルなシティズンシップの価値を取りあげる。ユベール・リウ（Hubert Rioux）は経済ナショナリズムの観点から見たケベック・モデルについて、小川浩之はイギリス帝国・コモンウェルスと小国の関係について論じる。フランソワ＝オリヴィエ・ドレ（François-Olivier Dorais）はケベックの若者たちの留学先と帰国後の社会における役割の関係について、鶴見太郎は帝国におけるエスニック集団が小国を築いた例としてイスラエル国家に結実する歴史について考察を深める。海外学術キャラバン渡航前に、日本側での事前準備会合も予定している。

さらに、可能であれば、2022年1月～3月頃にオッド・アルネ・ウェスタッド教授（イェール大学歴史学部）を招聘し、国際セミナーを開催したい。